

日本の新宗教の組織的展開 ④

生長の家のブラジル伝道

ブラジルにおける日本の新宗教のなかで、最も知名度が高い教団は生長の家だといえる。現在、信者総数は350万人を数えるともいう。この人数は教団発行の主たる3つの機関誌の発行部数の総数に基づいているとみられ、仮にすべての雑誌が読まれているとしても、読者層のどの範囲を「信者」と呼ぶかは判断の余地がある。しかし、同教団が文書布教に力を入れ、ラジオやテレビでの放送メディア布教も活発で、近年ではインターネットのユーチューブで講演録を配信するようになってきているということは注目すべきだろう。

生長の家は、戦前から日本人移住者の間で漸次広がっていた。一般に入植地で生活していた移住者の多くは、一旦病気に罹っても十分な医療施設にかかることができないという不自由さを抱えていた。病気の平癒を願うがゆえに、宗教を求めることは自然の成り行きだった。生長の家のブラジル伝道の基礎をなした松田兄弟もそうだった。

サンパウロ州ドアルチーナ市でコーヒー園を営んでいた松田大二郎は、1934年、開拓前線で流行っていたアメーバー赤痢にかかって病床についていた。彼は4人暮らしの大黒柱で、弟の己代志と一緒に住んでいた。ある時、己代志が近くに住人から書物を借りたが、そのなかに『生命の実相』第1巻が入っていた。全40巻をなす、生長の家の創始者谷口雅春が著した著作の1冊である。

大二郎はこの書に引き付けられ、「十頁余り読むうちにその尊い真理が心の琴線に触れ、『病氣本来なし。肉体なし』の真理に歓喜勇躍した」という。彼はこの感動によって奇蹟的な神癒を得た。大二郎はその後、日本の本部「光明思想普及会」に連絡をとり、弟の己代志とともに雑誌の定期購読者になった。いわば生長の家の「信者」になるための入会手続きを行ったのである。

以後、二人は生長の家の教えを広めることに動しんだ。彼等の活動は、「クラドル（呪術者）」として近隣のブラジル人の耳目を集めるようになった。松田兄弟の周囲にはあまり日本人が住んでおらず、非日系人がほとんどだったからである。兄弟は、ブラジル人宅を訪ねては生長の家の教えにもとづく我流の「神想観」（瞑想法）を伝え、聖經『甘露の法雨』の読経を行った。しかし、信者として定着する者はいなかった。

日本人移住者が彼等にたすけを求めてくるようになったのは、二人の宣教活動の噂が広がってからのことである。生長の家の初期のブラジル伝道で興味深いのは、天理教のように熱心な布教師が中心になって進められたのではなく、偶然のようにして読んだ本によって救済を得た移住者が、自己流の布教活動を行うことで広まったということである。文書布教の好例と言えるかもしれない。

生長の家は、先ず、サンパウロ州西部奥地に伸びる鉄道のパウリスタ沿線で広がった。その一帯にはコーヒープランテーションがあり、日本人移民が入植していたからである。その後、サンパウロから北部に伸びるノロエステ沿線地域にも伸び、1935年にはブラジル最初の支部が誕生している。

ノロエステ沿線で活躍したのは、松田己代志の指導によって肺結核から奇蹟的にたすかった大前勝とその弟潔だった。松田兄弟と大前兄弟は、ブラジルにおける生長の家信者の初期の伝

道者として讃えられている。1940年頃にはサンパウロ市やパラナ州ロンドリーナ市周辺に教えが広まった。

信者と呼べる人は全て日本人だった。それは、

ポルトガル語で布教できる人がいなかったことが一番の理由である。この頃の布教は「病氣治し」が中心で、生長の家に人生相談や心の豊かさを求める人はいなかった、とされる。信者は「奇蹟」を契機として得られた熱心な信仰心を得たものの、「教えを正しく布教できる人」は少なかったのである。

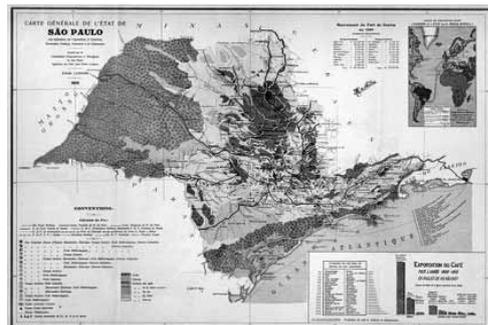
ブラジル生長の家が日本の本部と連絡を取り、一つの組織として連携するようになったのは1951年である。パウリスタ沿線やノロエステ沿線の信者が増えたことで「サンパウロ市近郊連合会」が生まれ、その後「生長の家全伯連合会」が結成された。同年には、創始者谷口雅春から「生長の家ブラジル総支部」の許可が下り、1952年に日本から講師が派遣されている。

戦後、ブラジルの日系社会では敗戦にかんする認識の違いから、勝ち組と負け組の二つの派閥が生まれ、テロ行為が行われるという悲劇的な歴史があった。生長の家も例外でなかったが、全伯連合会の結成以降、同教団ではその問題が解決するようになった。

ブラジル生長の家は、1960年代末から積極的にブラジル人伝道を開始するようになった。これは谷口雅春が1963年にブラジルを訪問したことがきっかけだった。谷口は、ブラジルに様々な民族が移住しているため、ここで教えを広めることが、ひいては全世界に生長の家の救済運動を伝えることになると考え、信者に対してブラジル人伝道を鼓舞したのだった。

1965年には、サンパウロ市内のカトリック教会を借りて一日錬成会が実施され、1966年にはポルトガル語伝道局が設置された。そして1970年代初頭には早くも非日系人信者が日系人を上回ったとされる。当時、信者はポ語伝道会（成年男子）、白鳩会（成年女子）、青年会（青少年男女）に分けられていた。このうち、ポルトガル語伝道局は、教団内の使用言語が日本語からポルトガル語に移行する過渡期に設けられたが、現在ではその必要性がなくなったため廃止されている。

前山隆が1980年代に行った調査によれば、ブラジルの生長の家教団は日系人と非日系人の異なるエスニック集団で形成され、二つの集団間には協力もコミュニケーションも敵対関係さえも存在しなかったとの指摘がある。現在では、日系人の多いサンパウロ州やパラナ州の一部の教化部（集会場）で日本語による集会が行われているところがあるものの、たとえば日系人の少ない北東部レシーフェでは、3,000人ほどの信者に日系人はわずか1家族しかいない。その意味で、生長の家はブラジルの宗教になったといえる。とはいえ、教団の幹部クラスには日系人の割合が多いように思われる。



サンパウロ州に広がる鉄道網 (1910年) (<http://www.ndl.go.jp/brasil/data/L/010/010-0011.html>)